

モノと情報班 雲南県誌グループ

平成 17 年度雲南県誌グループ活動報告

兼重 努 (滋賀医科大学)

Activity Report 2005 of the Yunnan County Gazetteers Working Group

Tsutomu KANESHIGE (Shiga University of Medical Science)

雲南県誌グループの任務は雲南省の生態史データベースを構築するための基礎資料を作成することである。そのために雲南省の県誌の「大事記」の翻訳作業をすすめると同時に、個々のメンバーは県誌の記述を利用しながら、各自の関心にもとづいて雲南省の生態史にかんする研究に取り組んでいる。また本グループはモノと情報班に属するため、モノと情報班全体の活動や研究にも関与している。

以下、平成 17 年度に本グループがおこなった活動と各メンバーの研究報告 (本報告書に掲載) の概要について紹介する。

1. 平成 17 年度における雲南県誌グループの活動

平成 17 年度における本グループの活動は以下のとおりである (表 1 を参照)。

1) 県誌の翻訳作業

本グループでは雲南省における 128 県の県誌の大事記の翻訳をすすめている。翻訳のスピードアップをはかるために、平成 17 年度は大阪外国語大学の学生・大学院生の数名の翻訳アルバイトを新規に採用した。アルバイトへの説明会および翻訳にかんするミーティングをあわせて 4 回行なった。メンバーのあいだで県誌入力作業のすすめかたにかんする打ち合わせ会も開いている。

また平成 17 年度は雲南省の「県誌」(65 冊)、「市 / 地区 / 州誌」(40 冊)、「省誌」(40 冊)をあらたに購入した。これで未収集の県誌は『武定県誌』、『易門県誌』、『弥渡県誌』、『貢山県誌』、『鎮康県誌』の 5 冊を残すのみとなった。

2) 県誌を利用した雲南省の生態史の構築

県誌研究会を開催し、県誌のデータの有用性にかんする議論もおこなった。それに加えて、県誌を使った研究と碑文を使った研究の接合の可能性を探るため、ダニエルズ歴史班を招いてクロニクル研究会を 2 回開催した。さらにモノと情報班全体の WG (Working Group) 研究会にも参加し、県誌作業の経過報告を行なった。

3) 雲南エクスカージョンの実施

年度末には雲南省に赴き文献資料収集およびエクスカージョンを行なった。日程の詳細は表 2 を参照。

エクスカージョンでは生態史にかんする多くの新知見が得られ、実りが多いものとなった。紙幅の関係もあるので、その成果の一部に限って紹介しておこう。元陽県では嘎娘郷の紙廠を訪れ、竹を原料とした紙つくりの工程を見学した。また緑春県では県城のラック工場を見学し、ラック精製の工程について聞き取りを行なったのみならず、同県の龍碧村のラック養殖の現場を訪れ、地元の人から話をきくこともできた。この詳細については、本報告書所収の宮脇論文を参照されたい。また退耕還林政策が元陽、緑春県一帯で施行され、それが当地の生態環境にかなり大きな影響を与えているという示唆も得られた。シーサンパンナ州においては景洪の市場に赴き、竹とタケノコについて調査を行なった。さらに、モンラ県易武においては、茶案碑および茶加工場を見学することができた。

エクスカージョンには本県誌グループ以外に、モノと情報班から田口理恵と小島摩文氏ダニエルズ歴史班から

表1：平成17年度雲南県誌グループの活動一覧表

4月5日	県誌作業打ち合わせ会①（於・総合地球環境学研究所）	参加者：秋道智彌、兼重努、安達真平、山口哲由、何大勇、雨森直也、宮脇千絵
6月6日	県誌作業打ち合わせ会②（於・総合地球環境学研究所）	参加者：秋道智彌、兼重努、安達真平、何大勇、雨森直也、宮脇千絵
7月8日	クロニクル研究会（於・京大会館） ・県誌を利用したトピック選定について（兼重・宮脇・雨森） ・碑文作業の経過報告（清水・立石・西川・増田） ・時空間データベースの構築に向けて（久保）	参加者：久保正敏、兼重努、清水亨、立石謙次、西川和孝、増田厚之、安達真平、山口哲由、雨森直也、宮脇千絵
7月24日	WG (Working Group) 研究会（於・総合地球環境学研究所） ・県誌作業の経過報告（兼重） ・ラオス生態史クロニクルの経過報告（西本） ・RCCの経過報告（田口） ・RCCとFCCの相関関係について（秋道） ・時空間データベースの構築に向けてV2(久保)	参加者：秋道智彌、久保正敏、兼重努、田口理恵、西本太、宮脇千絵
7月26日	「県誌」（41冊）、「市/地区/州誌」（40冊）、「省誌」（27冊）購入	
10月16日	クロニクル研究会（於・国立民族学博物館） ・班長会議概要報告（秋道） ・今後のスケジュール確認 ・雲南歴史班活動報告 ・県誌グループ活動報告	参加者：秋道智彌、久保正敏、兼重努、清水亨、立石謙次、西川和孝、増田厚之、安達真平、雨森直也、宮脇千絵
10月22日	新規アルバイトへの説明会	参加者：久保正敏、兼重努、宮脇千絵
11月	新規アルバイト 入力作業開始	
11月	「県誌」（19冊）、「省誌」（13冊）購入	
12月3日	謝金アルバイトとのミーティング（於・国立民族学博物館）	参加者：久保正敏、兼重努、宮脇千絵
1月15日	県誌研究会（於・総合地球環境学研究所） ・雲南県誌を使った人口データベースの作成と利用の経過報告（安達） ・フランス海外県公文書館・国立図書館での収集資料の紹介（瀧） ・「県誌」入力データの内容についての議論	参加者：秋道智彌、久保正敏、兼重努、田口理恵、清水郁郎、安達真平、瀧千春、長谷千代子、宮脇千絵
1月28日	県誌アルバイトへの説明会	参加者：久保正敏、宮脇千絵
2月21日	県誌アルバイトへの説明会	参加者：久保正敏、兼重努、宮脇千絵
3月10日 ～24日	雲南省にて書籍購入とエクスカージョン	参加者：秋道智彌、兼重努、田口理恵、小島摩文、清水亨、西川和孝、増田厚之、安達真平、宮脇千絵
3月	「県誌」（5冊）購入	

(作成者：宮脇千絵)

表 2 : 雲南エクスカーション日程

3月10日	昆明到着
3月11日 ～14日	昆明にて書籍購入（兼重・宮脇）
3月15日	雲南大学人類学博物館の尹紹亭先生と研究打ち合わせ
3月16日	エクスカーション出発、昆明－元陽（新街鎮）
3月17日	元陽（新街鎮）－元陽（勝村）、紙廠、大伍寨
3月18日	元陽（勝村）－緑春、牛角寨の定期市
3月19日	緑春－江城、緑春県ラック工場、龍碧村
3月20日	江城－景洪
3月21日	①モンラ県の易武にて茶工場、ヤオ族移民村等 ②モンラ県の熱帯植物研究所、ゴム園、ジノー山
3月22日	景洪の農貿市場、景洪－昆明 雲南大学人類学博物館の尹紹亭先生と研究打ち合わせ
3月23日	①帰国 ②広州にて書籍購入（兼重）
3月24日	帰国（兼重）

（作成者：宮脇千絵。ただし兼重が一部加筆後、表に加工）

清水享、西川和孝、増田厚之氏も参加し、研究情報や意見を交換することもできた。

## 2. 各メンバーの平成 17 年度の報告

平成 17 年度の雲南県誌グループの研究報告は兼重、宮脇、長谷、安達、瀧の 5 名がおこなう。瀧報告をのぞいた 4 本の報告は県誌に関連するものである。

まず兼重報告では、民国期末までにおける雲南省のケシ / アヘンの生産、流通、利用（消費）の概況について、さらに 1950 年代以降のケシ / アヘンの禁止令、代替作物の導入が、紅河県およびその関連地域の生態環境にたいして与えた影響や変化について、『紅河県誌』の記述をもとに跡づける。

つづく宮脇報告ではラックを事例に挙げて「県誌」の記述を紹介し、県誌データの利用方法について述べる。さらに、上述の雲南省エクスカーションで訪れた緑春県のラック工場とラック養殖場の調査で得られたデータも提示する。

以上二本の報告は生態史クロニクル構築における県誌の有用性を示す事例研究である。

三番目の長谷報告では、中華人民共和国成立以降の変容のなかで、人々の生態環境との具体的な関係およびその関係についての認識がどのように変わってきたのかという問題をとりあげる。雲南省内の各県の県誌資料を利用しつつ、様々な動物（ブタ、ウマ、ウシ、トラ、ゾウ）と人間との関係に注目して、その変容の一端について指摘している。

四番目の安達報告では雲南省「県誌」を使った人口データベース作成の概要とその意義について詳しく述べ、資料的な価値が高い人口データもあわせて提示している。

長谷、安達の両報告も県誌の記述の利用の可能性について具体的に論じている。

最後の瀧報告は、ラオス関係のフランス語史料の読解に取り組むことで、他のメンバーと異なる独自の貢献をしている。具体的にはフランス植民地時代ラオスの諸状況（農業・森林など）と、植民地政府の政策等の歴史的背景の解明を目標に、フランス語史料群を紹介すると同時に、それらの今後の利用の可能性について論じている。今後、ラオス側のフランス語史料を雲南側の県誌史料と組み合わせることで、ゆくことによって雲南とラオスの間をつなぐ生態史の構築が可能性になるものと期待される。